

近世怪異小説の一流流

穎原退藏

白日に人を談じ昏夜に鬼を語るは、古人の深く戒める所でありながらも、とにかくそれは面白い事らしい。青い紙で張りたてた行燈の燈心が、一筋減り二筋減り、廣い座敷の隅とが段と暗くなつて来る。誰も氣味が悪いにはちがひないのだが、それでも何ぞといへば百物語を聞きたがる。人間のもつて生れたこの好奇心が、やがて文藝の世界に怪異小説の大きな一の流を形つた。我が國ではそれが偶と因果應報の佛敎觀と結びついた爲に、一面夙くから怪異談の蒐集が行はれたと同時に又一面説話の浪漫的構成への成長が妨げられる事も少くなかつた。もとより今昔物語や宇治拾遺や古今著聞集や、その他中世の所謂説話文學に現はれた多くの怪異談は、必ずしも『日本靈異記』の著者と同じ意圖の下に採録されたものではなかつたらう。表には善惡應報の理を掲げながらも、實は傳奇的興味を主としたものも少くないのである。しかし近世に至るまでの我が怪異小説の發達が、佛敎の傳道と最も大きな交渉をもつて來た事は争へない事實であつた。のみならず近世に入つてからも、應報觀との絶ち難い縁は、まづ正三道人の『因果物

語』にも明かに示されて居る。この書はいふまでもなく一種の怪異説話集であつた。例へばその中の亡妻の卒都婆が人に化して子を生み育てた話の如き(片假名本中卷の廿三、幽霊來リテ子ヲ産ム事。平假名本卷一の十二、母の卒都婆わが子に乳をのませし事)、『とのゐ草』にやゝ小説化されて以來(同書卷三の一、卒都婆の子うむ事)、人情咄風な怪談として種々に變形し成長して來て居る。しかし從來の近世文學史が、これを佛敎的敎化の假名草子中に分類し去つて、特に文藝作品として取上げる事がなかつたのは當然の事であつた。近世に入つて新たな展開を遂げた怪異小説の源流は、所詮このやうな談理の方便から離れた所にあつて、自由な創作的精神の動きを見得る方向に於いて求められねばならなかつたのである。説話の内容そのものの類似の如きは、むしろ文藝以前もしくは以外の問題にすぎなかつた。

近世怪異小説の新しい起點として、『伽婢子』をあげる事にはもとより異存はない。作者は自ら序支に「三敎おのゝ靈理奇特怪異感應のむなしからざることををしへて、其道にいらしむる媒とす。(中略)只兒女の聞をおどろかし、おのづから心をあらため正道におもむくひとつの補とせむと也」と述べて居り、假名草子のすべてがなほ啓蒙敎化の具たる立場を捨て得なかつた時代に、それは決して單なる表面的の辭と見るべきではなかつた。しかしその粉本からの翻譯乃至翻案の態度には、同じ作者の『新語園』などとは全く異つた創作意識が働いて居る事は明かである。丁意が『伽婢子』で努めた所はやはり説話のもつ好奇的興味を中心として、これを出来るだけ日本文藝の小説様式に近づけて描き出さうとする點にあつた。勿論そこに考へられた小説様式は、なほ多分に中世の傳統的色彩に富むものであつた。それはしかし時代からいつても、又了意個人の敎養から見ても、むしろ當然の事とせねばならぬ。ともあれ

こゝに怪異説話の集成が、始めて文藝作品に對する創作的態度を以て試みられたのである。さうしてその契機をなしたものが支那小説の傳來であつた事は、近世怪異小説の展開上極めて注意すべき事實であつた。支那小説と我が近世文藝との特別な交渉——就中後半期に於ける傳奇小説の一群が、支那小説に負ふ所のいかに多いかは周知の事である。が更に『剪燈新話』が夙く室町時代に舶載されて、こゝに『伽婢子』の出現を促した事は、近世怪異小説の新しい源流として、支那小説の影響を明かに認めさせねばならなかつた。後來『伽婢子』に做つた類書の續出は、この結論を事實に於いて決定的に裏書して居る。しかし怪異説話が佛教傳道者の手から離れて、純粹に文藝的な方向へ成長すべき契機を、唐山傳奇の舶載といふ偶然的な原因のみに歸して考へる事は、恐らく文藝史の立場から見ても十分に正しい理解とはされないであらう。何故ならば我々は『伽婢子』の外に、——又それ自身の中にも——もつと異つた一の源流を確かに見出す事が出来るからである。しかもそれは室町末期・近世初頭の時代性乃至社會性の中から、自然に流れ出たものであるだけに、より重要な史的意義を認めねばならないものであつた。

『伽婢子』以前に『奇異雜談集』があつた事は知られて居る。のみならず支那小説との關係に於ても、それは『伽婢子』から遡るべき明確な一起點であつた。だが『奇異雜談集』が開板されて世に汎くされたのは遙かに後の事である。一部に寫本が行はれて居たにせよ、それが近世怪異小説の展開に直接與かる事は、さまで多かつたとは考へられない。随つて年代的にも『伽婢子』はまた近世怪異小説の祖たる地位を占めてもよい。しかし『因果物語』の類はこれを姑く論じないとしても、『伽婢子』に先だつて行はれた怪異説話集がなほ他に存しないのではなかつた。それは室町

時代の中期以後、諸大名の間に養はれた所謂御伽衆の咄を集めた種類のものに見出される。御伽衆については近來やゝ纏つた研究も出るやうになつたが（『國史學』二十一・二十三・二十四所載、桑田忠親氏「御伽衆の研究」等参照）、彼等が語つた咄の種類・内容等に關する検討は、まだ十分の成果を見るに至つて居ないやうである。しかし少くともその中に笑話・怪談の類が多く存したにちがひない事は、御伽衆の職掌から考へても容易に推察される。而してそれらの咄が時に諷刺を含み、世事に互る事があつても、その主な目的が消閑娛樂の具たるにあつた事も勿論であらう。御伽衆の説話に關して、もしこれだけの推測が當然認容されるならば、かうした特殊の社會的存在が、笑話と怪談の展開にいかなる役目を果すやうになつたかは、又自然に理解さるべき筈である。即ちそれらの説話は人から人へと口承される間にも、又一定の形で記録される場合にも、若干啓蒙教化上の顧慮は加へられたとしても、専らその滑稽もしくは好奇の興味を中心として展開して行つたにちがひないのである。そこに文藝的立場をとり得べき多分の契機が含まれる事は當然の歸趨であつた。さうすると近世の文藝史に新一の分野を拓いた所謂咄本と怪異小説との源流は、何よりもまづこゝに求められねばならぬであらう。さうした意味の怪異説話集として、こゝに最も注意すべきものは『會呂利物語』である。この書は刊記を附したものを知らないで、その開板年代を明かにする事が出来ないが、寛文十年の書籍目録にはすでに記載されて居るので、それより以前の刊行たる事は知られる。而してその中の一二の説話が、明かに『伽婢子』の粉本だと認められる點で、恐らく『伽婢子』より以前の出版であらうと考へられる。それはこの書の

卷四の六 悪縁にあふも善心のすゝめとなる事

の二條が、前者は『伽婢子』の卷八「幽靈出て僧にまみゆ」、後者は同じく卷十三「山中の鬼魅」の前身と見られる點である。——他にも部分的の類似はなほ見出されるが、一の説話として全く同一型のもののは右の二條である。——勿論説話の類似だけからいへば、兩者の間に却つて逆な關係も考へられるし、又他に共通な粉本が存在したらうといふ假定も可能である。しかし『會呂利物語』の説話の質樸な構成は、『伽婢子』から『會呂利物語』へといふ推移を認めさせるには困難であらう。だから他に共通な粉本があつたとしても、『會呂利物語』の開板——少くとも成立が『伽婢子』に先だつといふ推測は、ほゞ肯定して宜いと思ふ。だが兩者に於ける年代の前後は實はこゝではさして問題とする必要はない。それよりは『會呂利物語』が説話集としていかなる性質のものであるかに、まづ我々は注意せねばならないのである。その爲に同書の序文をそのまゝ引用しよう。

人の心を慰ることわざがぎりなくさまゝなれとも、貴賤貧富のさかひありて心にまかせぬもてあそび事多し。其中に上がかみより下がしもまで隔なきたのしみは、見る物きく事を口にまかせてかたりなくさむにしくはなし。爰に天正の比ほひ、そろりといへる難談の上手有、大樹秀吉公に召れて常にかれを愛し給ふ。(中略)其辯舌博覽の名譽なる事は壺中に天地をこめ、瓢箪より駒をいだせし術にもすぎたり。ある夜大樹のまへにておどろくしき事をかたれとの給ふに、十づゝ十にをよべり。近習の人と是を書とめしに、年ひさしく反故にまじはりおほくはちりうせぬ。わづかに残りしをかいやりすつるもおしと、其品にたくえる物かたりのふしぎなるを、ひとつふたつくはへて今また書あらたむるもの歟。

右にいふ如く、基く所が果して會呂利の咄にあつたか否かはとにかくとして、それが御伽衆から傳はつた説話集であ

る事は明かである。即ち佛教傳道や外國文藝の翻案とちがつた立場にあつて、こゝに怪異説話の集成が試みられて居るのである。しかもその開板もしくは成立が『伽婢子』に先だつて居り、——少くとも殆ど同時に世に行はれて居たといふ事實は、近世怪異小説の展開を論ずる上に、決して閑却する事は出来ないであらう。

『會呂利物語』はその後度と題名を改めて重板された。『目覺物語』と題したのが最初に改板されたものらしく、ついで『會呂利諸國話』・『會呂利怪談咄』等の名でも行はれた。いづれも刊記を附したものを知らないが『目覺物語』はやはり寛文年間、他も延寶頃までの開板と推定される。勿論この書自体はなほ文藝作品としての鑑賞に値するものではない。しかしかうして屢々板を重ねたといふ事は、それだけですでに近世怪異小説史の上に何等かの記載を要求して宜いであらう。況んやその説話の集成並に流布の間に、文藝的展開を豫期さるべき契機を多分に含んで居たとすれば、從來の文學史がひとり『伽婢子』にのみ多くの頁を費して、『會呂利物語』に殆ど一顧をも與へて居ないのは、どうしても公平な態度とする事は出来ない。のみならず『伽婢子』の成立は、いふまでもなく支那小説の翻案のみによつたのではない。了意が他の説話の材料を何處から得て來たかは、なほ詳細な吟味が行はれて居ないやうであるが、その粉本の問題はいづれにせよ、「伽婢子」の名はすでに説話の性質についてある暗示を與へて居るものではないからうか。この題名は話の中に伽婢子の事が見える(卷三、牡丹燈籠。及び卷十、祈て幽霊に契る。)のに因んだ事は確かであらうが、一面又それが所謂御伽の咄たる意を匂はせたものである事も疑ひないと思ふ。——辨疑書目録によれば『伽婢子』の一卷から五卷までを抜いて、『御伽物語』(後述の『御伽物語』とは全く別本。)と題した後刷本もあるといふ。それは『伽婢子』がさう題して

も宜い性質のものである事を、明かに示したものと云へる。——後來相ついで「御伽何々」と題した怪異小説が出た事は、これまで單に『伽婢子』の模倣もしくは影響としてのみ説かれて居るが、それは寧ろ遡つて御伽の咄との關係に、重きを置いて考へられねばならない事であつた。勿論「眞紅のうち帯」や「牡丹燈籠」に至つて、始めて怪異説話の文藝化は實現されたと言つて宜い。又その後の展開に支那小説の興る所が益々多かつた事も明かである。しかし怪異説話をさうした文藝的方向へ進ませた根本的な因由が何處にあつたかを忘れてはならない。

御伽の咄が先づ集成されたといふ意味だけでも、『會呂利物語』のもつ史的意義は十分認められねばならなかつた。のみならず後出の怪異小説に於いて、この書から直接説話の系統を引いたと見るべきものもまた少くないのである。現に『伽婢子』の二條が、こゝに基いて居ると見られる事は前に述べた。だがさうした説話の交渉のみならず、同じく御伽の咄の集成といふ點で、最も注意すべき關係をもつものは『とのゐ草』一名『御伽物語』である。辨疑書目録によれば「とのゐ草」が原題名で、「御伽物語」は改題名であるといふが、元祿五年板書籍目録には「御伽物語又はとのゐ草とも」とあり、寶永三年板書籍目録には「との井草御伽物語とも」とあるので、兩題名の關係は版の前後といふよりも、むしろ同時に別名として取扱はれて居たらしい。その刊行年代は朝倉無聲氏によれば(徳川文藝類聚第四、怪談小説の例言・日本小説年表)萬治二年との事であるが、この説には疑を挿むべき點が多い。朝倉氏は『とのゐ草』の名は全くあげず『御伽物語』の刊行年代として記して居るのであるが、「とのゐ草」・「御伽物語」のいづれの名も寛文の書籍目録には見出されない。又『とのゐ草』と題した方は卷一・二・三だけの零本しか寓目して居ないので、その刊記を確かめる事が出来ない。

が、管見に入つた『御伽物語』(京大國文研究室藏本)には「延寶六歲午九月吉日」の刊記がある。しかもそれは後に刊記だけを改めたものらしくも思はれない。加之辨疑書目録には

御伽物語 似船作 冊 との井艸

とあり、即ちこの書の作者を似船と傳へて居るのである。原本序跋には署名がなく、又その中にも作者について述べた所はないが、似船の他の著作と比較した結果、辨疑書目録の記載はこれをそのまま肯定して宜いやうである。もしさうだとすれば、似船の他の著の多くが延寶以後の刊行にかゝる——寛文年代にたゞ一つ俳書『蘆花集』の撰がある。

(原本未見。阿誰軒誹諧書目録による。)

のから見ても、萬治二年の刊行は些か早きに過ぎる。案ふに朝倉氏は、本書の序文の中に

「この反古よ、萬治^{よろ}る三つの陽^{はる}よりむなしく蟬^{しん}の家となれり」とあるのから、直にその刊行年代を推定したのであるまいか。しかしこれは單に原稿の成立年代を示すものにすぎない。のみならずそれが刊行の際に、少からず増補文飾を加へられたであらう事は、その内容に徴しても想察されるのである。恐らくこの増補文飾を加へて出版した者が、即ち似船なのであらう。『とのゐ草』の成立並に刊行年代については、右の如く若干考證を試みねばならなかつたが、次に本書と『會呂利物語』との間には、ほど次の如き説話の交渉を見出すのである。

○會呂利物語

○とのゐ草(御伽物語)

- 二ノ四 あしたか蜘蛛のへんげの事……………二ノ三 百物語して蜘蛛の足をきる事
- 二ノ七 天狗はなつまみの事……………二ノ六 女は天性きもふとき事

- 三ノ五 ねこまたの事……………二ノ一 ねこまたといふ事
- 三ノ六 おんじやくの事……………一ノ三 武州淺草に化物ある事
- 四ノ四 よろづのもの年をへてはかならずばくる事……………一ノ一 すたれし寺をとりたてし僧の事
- 四ノ六 悪縁にあふも善心のすゝめとなる事……………二ノ四 甲州の辻堂に化物ある事
- 四ノ九 耳きれうんいちが事……………二ノ十一 小宰相の局幽靈の事
- 五ノ一 たつた姫の事……………四ノ二 年へし猫はばくる事
- 五ノ五 因果さんげの事……………五ノ七 學僧ぬす人の家に宿かる事
- 五ノ六 よろづうへくの有事^上……………一ノ二 七命亡し因果の事

右の中には、例へば「ねこまたの事」と「ねこまたといふ事」、「因果さんげの事」並に「よろづうへくの有事」と「七命亡し因果の事」との如く、その間明かに直接の關係を認むべきものもあるが、すべてが必ずしも『曾呂利物語』から材を得たとは斷じ難いかもしれぬ。又纔かに部分的の類似に過ぎないものもある。しかし少くとも説話の系統からいへば、それらが同一根源に發して居るべきは疑ひない事であらう。『御伽物語』の跋には「右このさうしわれ七八歳より五十有餘の今、四十五年の間見聞せしを書ならぶれば」——この跋文には署名がないが、もし似船だとすれば延寶六年は彼の五十歳の時に當る。又序文が似船のものしたものであれば、「先生このはなしをあつむ」とあつても師安靜の筆録に基くものと思はれるから、この跋文も安靜が書いたものかもしれない。しかし安靜は寛文九年（通説延寶四年は誤）に歿した事だけが知られて享年は明かでない爲、この五十有餘が即ち萬治三年の春に當るか否か確

かめられない。——とあつて、集めた説話は専ら筆者の見聞によるものの如くであるが、中には明かにその出所を知り得るものもある。例へば卷二の五「三人しな／＼勇ある事」は『奇異雑談集』卷一の四「古堂の天井に女を磔にかけおく事」に基き、卷五の六「たこもおそろしき事」は『義殘後覺』卷四「大蛸の事」に出て居る。又既に述べた如く、卷三の一「卒都婆の子うむ事」は『因果物語』から得たものであらう。もし子細に調査を試みるならば、その他にもなほ文献上の關係を知るべきものは多いにちがひない。だがいつれにせよ前述の如く、『會呂利物語』と直接の交渉を有し、若しくは同一系統に屬すべき説話を多く含む事は、その大部分がやはり御伽の咄としての性質をもつて居たものである事を十分推察せしめる。「とのお草」、又「御伽物語」といふ題名もまた明かにその意を示すものであらう。『義殘後覺』の一節がその粉本となつて居る如きも、同書の内容が當時屢々御伽衆の話題となつた武邊咄や怪異談の集と見ても宜い點で、その關係は輕々に看すごせない。しかしそれよりも更に注意すべきは、さうした『會呂利物語』やその他の御伽の咄に胚胎した説話が、『とのお草』に於いていかに文藝的な成長を遂げて居るかといふ事である。それは前にあげた『會呂利物語』と『とのお草』との對照表について、一とこれを吟味しても直に知られる事であるが、例へば『とのお草』卷二の十一「小宰相の局幽靈の事」の中で、座頭團都が耳を失つた話は、『會呂利物語』の「耳きれうんいちが事」と關係があり、——類話は當時の他書にも見え、柳田國男氏の『一ツ目小僧』によれば民間説話としても各地に散在してゐたらしい。——これに他の説話を取合せ、もしくは作者が新に想を加へて構成したものであらう。而してその結果いかに神秘的な怪奇美が説話の中に描き出されて居るかは、一讀して明かな所である。

後年『御伽厚化粧』(享保十九年刊)の一節に見える「赤間關留幽鬼」は、『とのゐ草』に殆どそのまま據つたので、更に小泉八雲の『怪談』(Kwaidan)中の一話 The Story of Minunashi Hoieki (系統を引いて居る。又『とのゐ草』卷二の四「甲州の辻堂に化物ある事」は、『伽婢子』卷十三「山中の鬼魅」と共に、『會呂利物語』卷四の六「惡縁にあふも善心のすゝめとなる事」から系統を引いたものと思はれるが、説話の悲劇的な效果に於いて、『とのゐ草』はむしろ『伽婢子』の上にあると言つて宜い。更に又『因果物語』や『奇異雜談集』からの換骨奪胎ぶりによつても、『とのゐ草』の文藝的素質は益々明かにされるであらう。『因果物語』はいふまでもなく、『奇異雜談集』にもなほ佛説的臭味を脱しない點が多いが、『とのゐ草』ではそれが全く傳奇・小説の興味を中心にしたものになつて居る。かうして『會呂利物語』から『とのゐ草』への展開を見る時、御伽の咄に發した近世怪異小説の大きな一源流が、そこに鮮かに看取されるではなからうか。

近世怪異小説の一源流として、『會呂利物語』・『とのゐ草』等の地位を明かにするには、なほそれらが後出の怪異小説に及した影響について説かねばならない。しかしそれについてはなほ十分に調べて居ないし、又たゞ説話の類似のみをあげても、それが直接の關係もしくは年代の聯繫といふやうな點で取上げられないかぎり、史的展開を論ずる上にはむしろ無意味に近い。例へば黄表紙『賽山伏 狐修怨』(寛政十年)の前半が『會呂利物語』卷一の十一「狐をおどしてやがてあたをなす事」と全く同一であつても、それだけで直に兩者の交渉を考へる事は出来ない。假に交渉があつたとしても、こゝに問題となる點は説話の援用ではなくて、それが滑稽化され黄表紙化されて來た徑路にあるべき

でそのやうな問題はやがて文藝の一般的な社會性・時代性と關聯して論ぜられねばならないであらう。それで今は姑くこの小説の範圍をこゝに止めておく。たゞ因に附記しておきたいのは、『とのゐ草』の原作自體が、『曾呂利物語』と同様にその後屢々板を重ねて居る事である。すでに『御伽物語』と題した別板がある事は既述の通りであるが（一）（一）は「見同一板下のやうに見えるが、實は全く別板である。恐らく、『とのゐ草』を影寫して新に板をおこしたせみであらう。」、又『とのゐ草』の卷四を上卷、卷五を下卷とし、『日待草』と題した上下二冊本も行はれた（これは『とのゐ草』の板下）。刊年は未詳であるがやはり延寶頃であらう。更に下つて明和四年刊『怪談笈日記』（臥仙子大江文坡作）五卷並に明和五年刊『怪談とのゐ袋』（臥仙子大江文坡作）五卷も、實は『とのゐ草』の改題本にすぎなかつた。これは兩書とも各卷の始め毎に、一二條の新しい話を加へただけで、他は『とのゐ草』の各卷から原作をそのまま數條づゝ抜き、これを適宜に按排したもので、板木までも舊板を利用したらしい。ともあれかうして此の書が後世まで行はれた事は、單に説話の流布・系統を考察する上からだけでも注意を要するであらう。なほ『とのゐ草』の中にも、やはり支那小説の影響と認むべきものは存し、そこに『御婢子』に對すると同様な見方もまた當然要求されねばならぬ。しかし今は専ら近世怪異小説の大きな一流流が、御伽の咄に發して居る事を理解する爲に、『曾呂利物語』や『とのゐ草』の歴史的・文藝的地位を明かにすれば足るのである。